

電力会社における技術開発への期待

代表取締役 副社長執行役員 **松原 和弘**

Kazuhiro Matsubara
Director, Executive Vice President



昨年秋、当社技術開発本部にて開催の「テクノフェア2010」を見学する機会を得た。当社の研究・技術開発に対しては、これまでも色々な立場から、自分なりに関心を持って注目してきたつもりであるが、実際に現場の声にも触れながら最新の情報を見聞できる機会とあって、非常に楽しみであった。

会場には様々な展示が並ぶとともに、研究者の皆さんからの説明にも熱意が感じられ、非常に印象的な1日を過ごすことができた。その中で特に感じた点を申し上げたい。

1点目は、ソリューションマインドが確実に根付いてきているということである。電力会社の第一の使命は、産業あるいはお客さまの暮らしを支えることであり、これは当社60年の歴史において何ら変わらないし、これまでも電気利用技術に関わる研究を長年にわたり取り組んできた歴史がある。しかるに今回自分がこのような印象を持ったのは、これまでの取り組みからさらに歩を進め、研究テーマの向こうにお客さまひとりひとりの姿が透けて見えるような、極めて具体的・実用的なものが増えてきたからではないかと思われる。

「防爆型電気式反応釜の開発」という研究紹介を拝見したが、これまでの熱媒油方式による加熱をIH方式に変えることで、省エネルギーのみならず、引火を防ぎ安全性が大きく高まるとのことであった。このようなテーマに具体的に触れるにつけ、ユーザーのニーズが様々である中、応用分野における電気の可能性は無限の広がりを持っているのではないかと、わくわくするような高揚を感じる。

2点目は、研究対象となる分野が著しく広がっていること、言い換えれば電力会社の経営課題がいかにその領域を急速に広げているかを、改めて認識したことである。

例えば、太陽光発電が大量導入された場合の系統影響を評価する研究のプレゼンテーションを拝見したが、このようなテーマがこれほどに注目を浴びる時代が来ようとは、つい10年前には想像もしていなかった。これはなにも私の想像力が不足していたからではあるまい。電力会社の経営課題をめぐる近年の変化、中でも環境・地球温暖化問題に関する議論の進展が、極めて急速かつ広範になってきたからであろう。

環境・地球温暖化問題に対処するためには、原子力の一層の活用を進めること、また太陽光はじめ自然エネルギーの大量導入に向けた技術開発が喫緊の課題である。前者の重要性は言うに及ばないし、また近年急速に現出した課題である後者についても、どのようなケースにおいて、いかなる対処をいつどれだけすればよいのか、望ましいネットワークとは如何なるものか、そのための「知恵」が研究者の皆さんに大いに期待されているのである。

そして、ここで忘れてならないのは、環境問題が地球全体の課題である以上、当社に期待される「知恵」は、当社の利益になるのみならず、業界全体、我が国全体、さらには地球規模での課題克服にもつながっていく可能性があるということである。原子力その他の発電技術についても、国内利用にとどまらず、当社あるいは我が国が今後海外展開に欠くことのできないものとして、ますます注目が高まっているところである。

電力会社の技術開発が持つ可能性の広がり思いをいたす時、あらためて大きな期待を感じてやまない。

私自身、電力に関わる者として、研究者の皆さんがこれら課題に対し創意をもって挑戦していけるよう支援していきたいと思う。